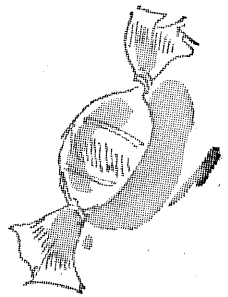


幼児が絵を描いている時 (三)

友だちと一緒に描画

青 木 隆



前回は、未就園児が母親に見守られて絵を描く場面や、母親からだんだんに離れ私と一対一の場面で絵を描く例などをとりあげてみた。描画の最初の段階では、クレヨンを動かして紙に何かが描けただけで、幼児は十分楽しんでゐる。そしてグルグルと手を自由に振りまわすようにして、一人きりで絵を描き、よく遊ぶようになる。やがてマルが画面に現われて来て、時にはそれらに「リンゴ」とかボールとか名前を付けたりする。このような過程を経て、顔を描こうと思えば顔が描け、自分の描いた絵は誰に見せても「顔」として認めてもらえるようになる。このころになると彼らはでき上がった絵の説明をしてくれたりする。

描画は原則として「描く人」と「見る人」の存在を必要としてゐる。そして描かれたものを媒体として両者の間に心がかよいあう。幼児にとってこのような経験は描画活動を一層楽しいものとし、描画内容を豊かなものとする。

ある意味では子どもの絵の発達には見る人が関与しているとも言える。前回までの例は、いつも大人―母親や私―が付添っていた。「見る人」は何も大人である必要はない。子どもでもいい。子どもばかりの集団の中での描画はお互い同志が「描く人」であると同時に「見る人」の役割をとる。そこでは集団としての相互の作用が複雑に働く。友だちとおしゃべりをしたり、絵を見せ合ったり、他の人の絵から刺激を受けたり、あたえたりして、お互いにささえ合いながら発達して行く。集団の中での描画は意義深いものがあり、このことによつて、……たとえば画像の概念的なパターンや色彩が形成される。

今回は友だちと一緒に描画の例をとりあげることにした。

1

初めの例は、前回にひきつづいてC子である。(四歳二ヵ月女

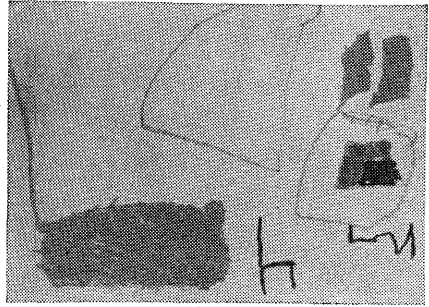


写真 1

児。前回記載の記録より約一ヵ月後である)

N君の家・室内の人数は六名、C子の他に子ども四人(小学二年男児N・同女児T・一年女児でC子の姉M・幼稚園年長女児R)、それに私である。皆机に向かって絵を描き始めたばかりのところにCが入って来て、一緒に描きた

姉M「何か付けてらっしゃいよ」

C「いいよ」

だいたい色を取り四角を二つ描き、両方を塗りつぶす。M一枚目を描きおえて、スケッチブックのページをめくる。

C「Mちゃん今の絵、見せてよ」

M「あとで」

C「少し見ちゃった」M返事なし。

C私の方を向いて「おみこし来た時、見たでしょ。私知ってるもん。……何を描こうかな」

その時Mが「あら、みんな黄緑使ってる。Cちゃんだけがう」と言う。(実際C以外は偶然一様に黄緑色を使っている)Cはだいたい色で塗る作業が一段落すると、すぐ黄緑色をとりあげ

C「黄緑、使おう」と(他の子どもの中には、すべて黄緑色を使いおえて他の色を持っているものもある)

C「もっと大きく描こう……はやく描いて、今度は赤でしょ。これ描いてから」しきりに一人ごとを言いながら黄緑で描く。(実際は赤を使用しなかった)

Rは二枚目になり、友だちの家の庭で遊んでいるところを描くと言う。(これも誰に言う訳でもない)

CはRの絵をのぞき込んで、

いと言う。スケッチブックとクレヨンを持参、姉Mの隣にすわる。向い側には幼稚園児のR。しばらくCはRの絵(画面を分割して色を塗る)を見ている。水色を取って描き始める。正方形の中に田の字のような形を描く。(写真1参照。家と窓のつもりか)二年生女児T「これ、お家なの?」Cに向かって聞く。

C「ちがうの。まだ描くの」青を取るがRの絵を見ている。

CはRに向かって「何、描いてるの?」

R「模様」

Cは自分の画面の田の字の部分を一区画ずつ塗りつぶす。青、次に黒。Cは姉Mに向かって

「虫にさされてかゆい」

C 「すべり台でしょ？」

R 「そうそう」

C 「私もいたもん。Yちゃんがいたんだよ。あとでおやつが出たんだよ」

R 私の方を向いて「ほんとにそうなの？」

C 今度は姉Mの方を向いて「Mちゃん、何かしてるの？ うさぎ？」

再び「何かしているの？」

M 「もう、うるさい」

C はだまってRの絵を見ている。Rは芝生の部分を黄緑で塗りつぶし、灰色、だいたい色を使用し、人物の衣服など着色。CはしばらくRの絵を見てから、自分の画面の黄緑色の四角を丁寧に塗り始める。そして次に黒をとりあげ、

C 「いすがあるの……温室描けないな」（いつの間にかRと一緒に遊びに行った家の庭を主題にしているようである）その時C子の母親が迎えに来て一緒に帰って行った。

以上たった一枚の絵、しかも途中で描く、ほんの十分たらずの間の出来事であるが、それでも年上のお姉さんたちの仲間に加わって絵が描けて、大変なご機嫌であった。

Cの位置からは、幼稚園児Rの絵が最も見やすいし、この中でRが一番年齢も近い。そのためかRが模様を描いている時は、

その影響が画面に現われたし、後半になってRがCと共通の体験を題材にとりあげたので、Cの絵は途中からRにひきずられて主題も変わって行った。この作品に関するかぎりCの絵にはRの模倣が断片的に見られる。前回示したプールやボール遊びの絵と比較すると、今回のC作品はかなり違っていることに気付く。構成も散慢であるが、色で塗りつぶした形（色面）が多く見られる。そしてC子がお姉さんたちの仲間入りを果たそうと努力していたこともわかるし、懸命になって描いた充実感を味わったことであろう。

2

次の例は幼稚園年少組四歳十ヵ月の男児D君である。同君はやはりF市に住み、両親と一歳七ヵ月になる妹と、それに白い大きな秋田犬という家族構成である。庭で一人きりでよく遊ぶし、このごろではお友だちも何人かできて遊びに行くようになった。D君は入園後一ヵ月ほど、あまり幼稚園に行きたがらず、中に入ってしまったばいなのだが、正門をくぐるまで母親をなやませた。理由は、幼稚園には同じような年齢の子どもが大勢いるからいやだ、と言うことらしい。特に子ども同志手をつないだりするのが一番きらいだった。ところが日曜日になると幼稚園に行きたがる。誰もいないガランとした園庭でのびのびと遊具を使って遊ぶのは大

好きであった。それでも五月中旬ごろからだんだんに幼稚園での生活になじんでいった。長い夏休みも終わり九月に再び登園する時は少々心配だったが、別段変わったことも見られなかったし、秋の運動会には母親と一緒にダンスを、終始ニコニコ楽しそうにおどっていた。しかし現在でも積極的に新しい友だちを作って訪問するようなことはしない。友だちはごく限られている。

この記録に登場する人物は二名で、D君のほかは小学校一年生のK君がいる。Kは隣に住んでいて、物心ついてからのなじみである。

さて、三時も過ぎたある午後のことである。私はD君の家に行き絵を描いてもらった訳である。

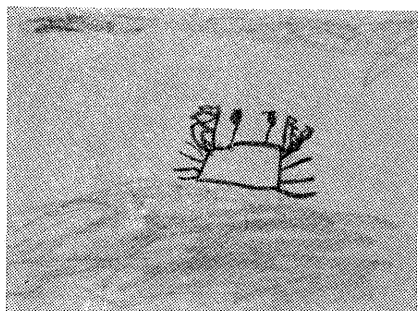


写真 2

1枚目、D君は机に向かってすわる。深緑色のクレヨンで箱から出しながら「虫を描いてもいいんだね」視線は私を見ないで画用紙に向けられている。

「えーと、じゃあ、かにでも描こう」描きながら一人でしゃべっている。

「かにかにはさみ。次にギザ

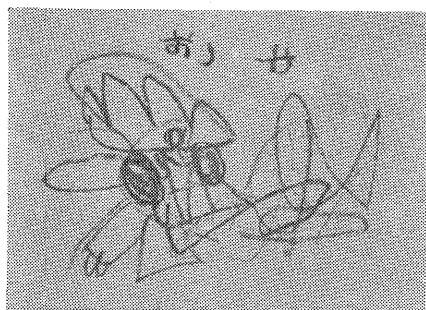


写真 3

ギザかにちゃんができた。次に海、描かなくちゃ。海は何色でしょうか。水色だ。ビチャビチャ、グニャグニャ……水、描けた。かにちゃん泳いでるところだ。空、描こう。

次に雲が白でモクモク……できた」(写真2、まるで実況放送でもしているようである。口をきいている時でも手

を休めず、特にリズムミカルな言葉のくりかえしと手は全く同時化している。約四分間)

2枚目 「何描こうかな。

ギザギザ描いて、こう描いて、まんまる描いて、またまる描いて……めちゃめちゃ描いてるんだ。ガキガキ、リングできた」(写真3、一分強)

3枚目、人物画をだまってい

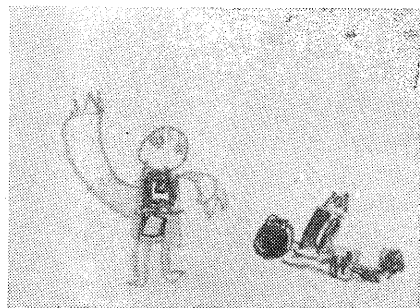


写真 4

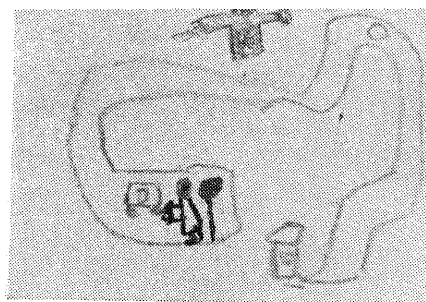


写真 5

「何色にしよう。まっしろけにしよう」白くぬるが上から水色を塗る。

「はねはこれだ(黄緑)できた」立ち上がる。

「車、見て描こう」ミニカーを一台持って来て机の上に置く。

「道を描こう」中腰になって

描いていたが……「次に目だ。目があんまりうまく描けないかな。鉛筆の方がいいかな。洋服が……どの色にしようかな。ロリロリロリ、ロリロリロリ」(クレヨンを左右に細かく動かすリズムに合わせてらくりかえして言う)

「黄色のボタンが一個……次にこの片腕は上にあげて……こっちは人は寝ているところだ」

「できたかな？」自問自答して「まだまだ。ランランラン、ランラカ、ランラン。ポケット……そいでね、これでねランラカ、ランラン。はい、できた」(写真4、約六分)

4枚目 「飛行機描いてみよう」と言って立ち上がり、部屋のすみから白いプラモデルの飛行機を持って来る。緑色で飛行機の

アウトラインを描く。

画面一ぱいに描く。すわりなおして、

「はい、描けた。あと人間描かなくちゃ。ピンボコ、ピンボコ……ビヨンビヨン……」色を塗る。目を描いた上から色をぬったので目が見えなくなる。

「人間だ。メンタマ、キョロリン、メンタマキョロリン、はい、できた」目を描き起こす。絵を見ながら

「帽子をかぶってるのだ」道路の中に簡単な自動車を描く。(持ってきたミニカーを見て描いた訳ではない)

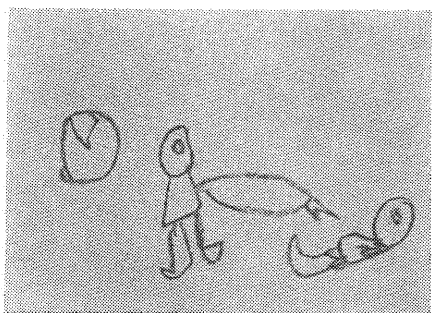
「車はここに動いて、ここに木があるんだ。これは石ころだ……ここにいくとおしまいだ」(写真5、約五分)

5枚目 「いろんなもの、持って来て描くんだ」立ち上って、

すぐ後にあるおもちゃの入った押入れを開ける。下段におもちゃが一パイ入っているが、タルカンパウダーのまるい箱一つだけを出して戸をしめる。席にもどって画面の左側に円一つ描く。

写真 6

「赤チャン描いて、おしりを描いて、パタパタ描くんだ」中央に人物像。



「お母さんの手は、よくのびるんだ」長い腕を描く。

「ここに赤チャン寝てるんだ」右側に横になった人物像。「できました」(写真6約二分)

リビングルームで電話のベルが鳴る。走って行く。「○○ですが……ウンウン……います」大きな声で「ママノ、ママノ」返事が聞こえるとすぐ席にもどって、スケッチブックをめくる。

この時、隣の一年生のK君が庭に現われる。私がKにも一緒に絵を描くようにすすめると、部屋に入ってくる。

K「何かいてもいいの？ V3でも？」(仮面ライダーの一人)

Dの母親がお菓子も持ってそっと入って来て、別のテーブルの上に置く。D立ち上がってそばへ行く。母親小さな声で「あとになさい」D「じゃあ、お水」小さな声で言う。K「ほくも飲む」

二人は連れ立って台所に行く。帰って来てKはすぐ絵を描き出すが、Dは「お水を飲めばいいのだ」と言ったが、すぐに絵を描こうとはせず、室内をグルグル歩き回る。時々お菓子を見ているが、手を出したりしない。四分間ほどウロウロしていたが、席にもどる。

6枚目 細い木の棒を持ち、

D「これ鉛筆のかわり、どうしてこれじゃ描けないの？」少しおどけた調子で言う。Kは返事をしない。

Dはピンクを持って「ダダダダ、ババババ」

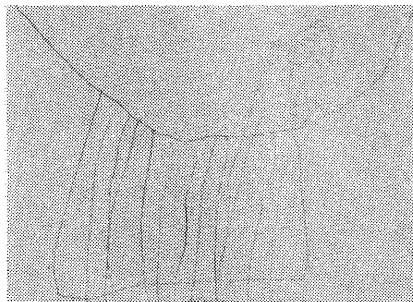


写真 8

の顔に似たうさぎだ」
D「これはさるだ。キャット
キャットのさるだ」
K「わあ、おもしろいさ
るだ」
D「このボタンおすとグッ

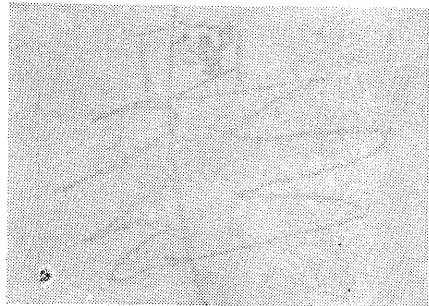


写真 7

K「なに、これ」
D「人間が何か作ってる
の」
K「なに作ってるの？ ビ
ルじゃないの？」
D「ビルじゃないもの……
工場だもの」(写真7、約二分)
7枚目 D「次は鉛筆だ」
と取りに行く。長短二本の鉛
筆を持って来る。「こっちは
古い方だ」と言って短い鉛筆
をKにわたす。鉛筆で描く。
D「これ見ただけで動物だ
ってわかるでしょ？」
K「これはうさぎ？ 人間
の顔に似たうさぎだ」
D「これはさるだ。キャッ
ットキャットのさるだ」
K「わあ、おもしろいさ
るだ」
D「このボタンおすとグッ



写真 10

V・スペクトルマンのゴリラの名) KはDの絵を見て、
K「変なラー!……おもしろい描き方。頭があとだ」(Dはラーの胴と手を描き、最後に頭を描く)
D「ギャー!」やめてしま
う。(写真9、三分間)
9枚目 Kはまだ二枚目を描き続けている。
K「ギザギザ星人だ」三枚目

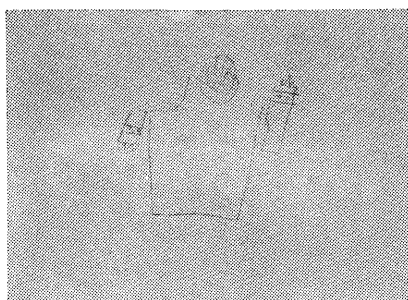


写真 9

グググッ」(写真8、二分
8枚目 (Kも二枚目に移
る)
D「ほんとはこのキャッキ
ャッが描きたい」
K「パンダに乗ったら、う
さががポコッ」(Kはパンダ
を描き、その上に乗っている
ような位置にうさを描く)
D「これラーの手」(T・

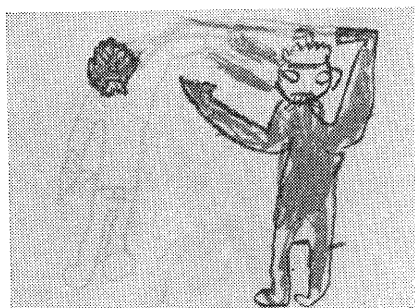


写真 11

急にDが「ひょっこり、ひょうたん島」と歌う。鉛筆をおき、
クレヨンに変える。
「あつ! まっ黒だ。まちがって黒だった。でもいいんだ」裏返
しにして、再び鉛筆で描く。
D「のぼしちゃうんだ。足から全体」
K「なんだ、今の歌?」
D「ひょっこりひょうたん島の歌か?」
K「そうだよ何チャン(チャンネルの意)だ」
D「ピンポンパンの時やってるよ」
D「目の玉は何色にしようかな」再び表側の絵の色を塗る。
K「目なら黒だ」
に移り、
K「わるだくみ星人を描こ
う」(写真11参照) 人物像を
二つ描く。
D「ひげはビュッ、ビュッ、
ビュッ……ゴリーの手……こ
れはひげなんだ。これ片腕
で、とれたのでラーの手、か
りてるの……ゴリーのベルト
は……」

D「じゃあ黒で描くか。いや、ピンクにしようか」目をピンクで描く。Kがのぞき込む。D「もうやめた」(写真10、約五分)

以上がD君の描画の記録のあらましである。私とのラポートはあるのだが、一枚目は他に比してやや固い感じがある。二枚目に当人の言う「めちゃくちや」を描いてから後は、かえってのびのび描けている。いろいろなおしゃべりをしながら楽しそうであった。K君がやって来てから急に変化は見られなかった。しかし、当人がさるのつもりで描いたものをK君にうさぎなのかと聞かれたり、頭を一番最後に描いて変だと言われたり——別にKはなじるように言った訳ではないが——Dの絵には余白も多くなり、描画中の独特なリズムミカルなおしゃべりも少なくなっていく。K自身はDの横で全く気楽に、少し調子をおとしているとさえ思えるほどであった。

Kの作品は1枚目がパンダ二匹他一匹、2枚目は、パンダとうさぎにギザギザ星人なるもの。3枚目が何とか星人である。Dが描画をやめるとKもやめてしまった。DとKは会話を交しながら、お互いの絵をのぞいたりしていたが、Dが年長児のKから直接影響を受けたと思われるものは画面に現われなかった。逆にDがスペクトルマンなどを描き始めてから、Kが星人とか称するものを描き始めた。

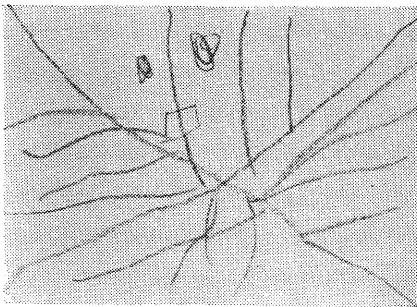


写真 13

真12)である。大変、固い感じのする作品である。この時も後半になってKが参加した。二人一緒になってからもDはKの影響をほとんど受けなかったと言える。Kは絵を描きながら次々にDを笑せるようなことを言い続けた。二人はゲラゲラ声をたてて笑いながら、それでも絵は描いて

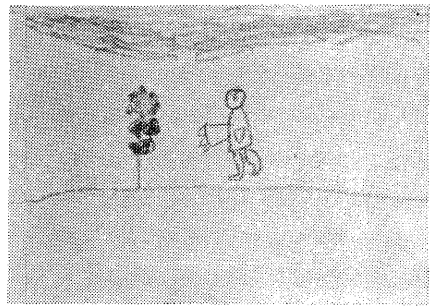


写真 12

ここに記した描画記録の二週間ほど前にも、この二人はKの家で顔を合わせ絵を描いている。その時始めてDは私と一対一の場面で絵を描いている。(小集団の中での描画はすでに何回か経験している)

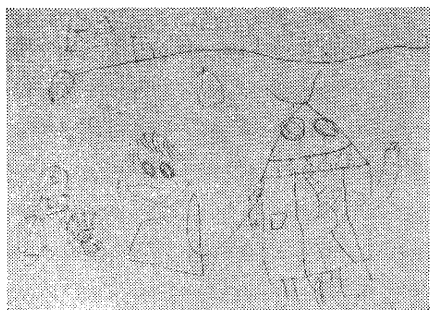


写真 15

印象としては大きな声を出して笑い、はしゃいでいるうちに絵を描くのが面倒になったという感じだった。

その後、私はDが家で描い

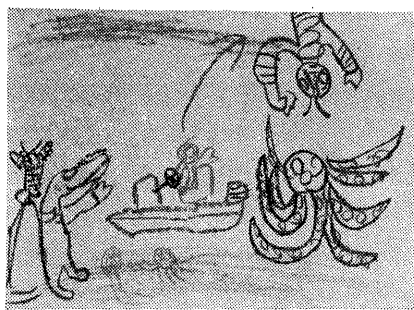


写真 14

いた。

Kは、写真14を描きながら画面に表われる怪獣のストリーなどをおしゃべりしていた。「たこ坊主」と言う言葉がしきりに使われた。この時もDは全く無関係な模様を描いていた。最後に描いた絵が写真13であるが、Dはおそらく画面を分割して色を塗り

わけのつもりで描き始めたようである。Kのたこ坊主の話で笑っている内に、画面に目や口を描き入れて「めっちゃ坊主」と言って、それっ

きり描画をやめてしまった。

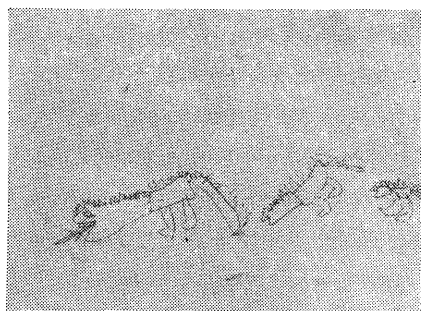


写真 16

たスケッチブックを見せてもらった。とりとめもない作品が多いのだが、私と一对一の時やKと一緒に描いた作品が多いのに驚いた。その中から私の写真の腕でどうやら撮れたものが写真15・16で、実物のサイズはB5版である。(実はもっといい作品が多かったのだ

が……)このスケッチブックから察するに、Dは誰もいない所で一人きりで描く時、最も内容の充実した作品ができるとしか考えられなくなった。

また最近、幼稚園児・一年生の五名の男児の小集団の中に加わって、Dに絵を描いてももらったが、一番すみの席に坐り描画中全く口をきかずに描いていた。(他の連中はいたってにぎやかだった。中の一人などは私の膝の上に乗って来て絵を描いていた)そして他の子どもたちが一応描画にあきて庭に出てしまうと、そと私の隣に席を移して、黙々と描き続けた。それから大変のびのびと四枚のかなり充実した作品を仕上げた。Dの場合は結局一人きりで描くことが一番楽しいことであり、そのための時間を十

分にとってあげることが当面は必要だと思えた。

描画はそれを描く人と見る人の両者の交流によって発達していくと先に述べたが、絵を描いた本人自身が見る人を兼ねていることも事実である。いささか詭弁めくが実際一番よく作品を見ているのは、描いた本人なのであろう。年少の幼児によって一人遊びの重要性が多く語られているが、一人きりの遊びにひたることは年齢のいかんにかかわらず必要であり、それなりの楽しさがある。自分の内側だけの世界に没入し次々に浮んでは消える心の中の映像と、実際に自分の手によって描かれた具体的な画像との間に交信が生まれる。画像が心像によって修正されたり、時には画像が優先して心像をより具体化し明確にもするだろう。描かれた



写真 17

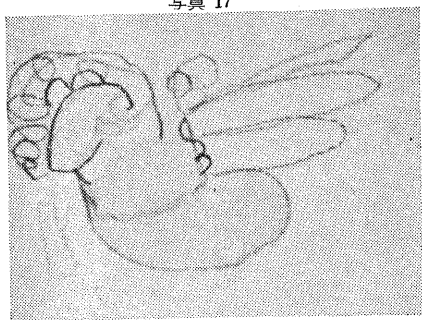


写真 18

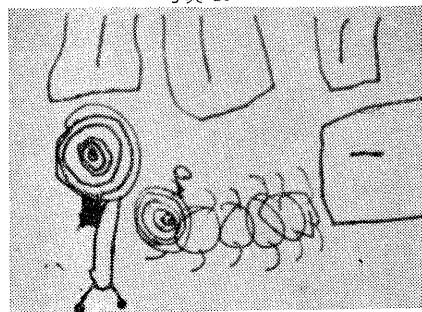


写真 19

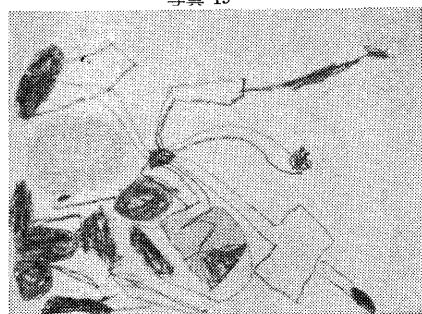


写真 20

画像が刺激となり、それに反応して描き加え……と言うように循環する時もある。このように心の内側にとりともなく浮かぶ心像を誰にも干渉されることなく描き散らし、最後にはともかく一つの作品として仕上げ、まとめる過程を、私はとても大切なものと考えている。そして描画の治療的側面を端的に表していると思う。

写真17から21までは三歳から五歳までの幼児が一人きりの時に描いた作品の中から選んだものである。やや極端な例かもしれないが、ほとんどの幼児のスケッチ・ブックの中には類似したものが発見されよう。彼らはいずれも私と向き合っている時や幼稚園では、人物画も描くし動物も家も描いている。ここに示した作品

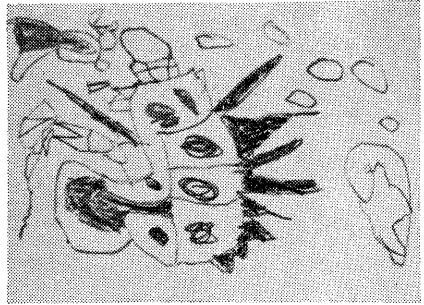


写真 21

は大人の目から見れば全く奇妙なものに思われがちである。しかしこの一見無駄に思える遊びから、新しい画像へと発展していく。それはこの種の画像の中に彼ら自らが発展の端緒を発見しているからである。つまりこれらは新製品開発のための実験や試作品なのである。しかしこのよう

な絵は一人きりで描画の時にのみ現われがちである。もちろんこのような実験の成果が、ほんとうに花開くのは集団の場であり、社会性のある具体的な作品の中においてである。私は描画の発達に関して集団とのかかわりを決して小さく評価するものではないが、今回は一人きりになりきることの意義、つまり主体性の確立を特に強調しておきたい。

おわり

幼児の教育 第七十三巻 第二号

二月号 © 定価一七〇円

昭和四十九年 一月二十五日印刷
昭和四十九年 二月 一日発行

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 津 守 真
発行者

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都港区三田五ノ一二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

101 東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所
所 フレーベル館にお願いいたします